

「日本人の造語法——地方語・民間語——」

鎌 田 良 二

方言学者である著者が、広く各地で、じにか耳にした地方語、民間語—方言—を中心として、「全国方言辞典」「言語生活」誌、各地方言研究者の報告、その他、多くの資料から得た興味深い語例によって、日本人の造語法を整理し、研究したものである。

まず、この書には「おもて」「もくじ」と「うら」「もくじ」とがある。「うら、もくじ」によれば大体この書の書き方がわかるように、造語の形式を中心として説いたものである。総計一八一ページの中、それぞれに要したページ数は、複合(3ペ)、造語史(12ペ)、名詞製作(85ペ)の中に八名詞十の十名詞、八名詞十名詞、八名詞十動詞、その他、八動詞その他十名詞、……のように、動詞製作(22ペ)では、同様に八名詞十助詞十動詞、八副詞十動詞、……、形容詞製作(16ペ)で八名詞十助詞十形容詞、八名詞十形容詞、……、形容動詞製作(6ペ)、副詞その他の製作(8ペ)接辞の利用(9ペ)語の文的形成、造語と音声美、造語の心意、となつている。

なお、巻末に「造語法についての諸研究」として大正二年以来の研

究六十六点をあげているが、これは非常に便利である。

この書には実に豊富な語例があげられているにもかかわらず、巻末に語彙索引がないのは惜しまれるが、著者の方からすれば、この書はあくまで「造語法」を示したものであり、ここにあげた語彙は単なる例であつて、著者の採集語彙の一部であるためかもしれない。

この書は明治書院の新書版であり、「焦点と盲点シリーズ」の一冊となつているところからみても、又、「おもて、もくじ」や、本文の書き方からみても、読者としては、国語学の専門家でなく、もっと広い層を考へておられるようである。

こういう書が広く読まれることによって日本語の造語法というものに目をむけたならばいろいろ国語学の研究資料にもなるうし、又、巻末「むすび」のことばに「この本をお読み下さる途中、生活語、方言について、この本にはない実例を、いろいろと思ひおこして下さつたであろう」とあるように、この書によって目を開き、そして地方にもこのような語があると報告されたら、「本書の実例についてのおこ

わり」の項で、著者が実例について「どのくらいの範囲に分布しているか、どこどこに、それが見いだされるか。私としては明言することができない」ということにも役立って来ることだろうし。又、そういう調査報告が多くの人々に出来るように、非常にわかりやすく、親切に書かれている。

そして、ここにあげてある語が皆、一応、語として成り立ち、おちついた日常語になったものをあげているのはよいことだと思ふ。

著者は造語の説明として、「心に思うとおりを、ことばに言いあらわして一語にする」として、いろいろの例をあげて、ごく自然に、語が出来るもののようにのべているが、だからと言って、「うら、もくじ」のような形式にさえしたがえは、いくらでも新しい語がどんどん出来るというものでない。

又、自然に出来ることばの例として、「幼児の自然造語」「子どもの製作」として説いているが、これも造語法がそれ程むずかしいものでなく自然に出来るということ「ことむずかしい造語法は大衆化しない。原理が高尙すぎると、おおぜいの人はずいづいきかねる。ついていきかねれば、どんなよい原理にもとづく造語も、世におこなわれずじまいになる」(7ペ)ということの説明として出したものと思われるが、しかし、その中には、語として成り立っていない。又、成り立ちそうもないと思われる、たった一回限りの言いそこないのようなものもある。「いつか子どもが、急に手がいたくなつたのを『キューテ』(急手)と言つた」(53ペ)とある。が、これなど無意識な発言ではないだろうが、こういうことばが、語として成立するためには、ただ、形式だけではかたづくことばではないだと思われる。

なお、広島市で「ケガレ」が「ひどい潔癖や」であり。大分県下で「ヒカリ」が「同族同類が集まってやる懇親会のことである(97ペ)」という成立過程がわかりにくいのが、これらは、特に、形式よりも他の理由によるものでないかと思われるが、何れにしても少し説明がほしいところである。

ここに、一、二の語について少し疑問をもつたものについてふれておく。

「なぞ」(謎)は東北で「なんぞなんぞ」といつていることから「何ぞ」であることがわかる(9ペ)という場合、ここではそういうことは、たまたま言えることかもしれないが、「なぞ」が東北で「なんぞ」となることは、他の場合を思い合わせるとき、窓がマンドとなることなどもあることから、必ずしも適切な例ではないのではないだろうか。

たとえをこのむ造語法として。

「せなかをかくだ道具のことは『まごの手』と言っている。愛らしい名まえである。これはおそらく、おばあさんがたの方からの命名であろう」(25ペ)となっているが、

大言海では

まご——麻姑。爪ノ、イト長キ仙人ノ名、転ジテ、器具ノ称トナル。まごのて(孫手)ニ同ジ。

まごのて——類聚名物考、二百五十一、調度部、九、「爪杖、まごのて、今案ニ、如意杖、一名ハ爪杖ナレバ、今云フ孫ノ手ト云フ物ニテ背中ナドノカユキ時ニ、搔ベキ為ニ作りシ人ノ小手ノ如キ物ナ

リ。

和漢三才図会、廿六、服玩具「爪杖、搔杖、末古乃天、按、爪杖用桑木作手指形、所以自搔背者、俗謂之麻姑手、麻姑仙女名也。云云。運歩色葉「麻姑、仙女也、学仙道、^一剪暇無之。^二依之。^三爬背物名之。^四とある。

又、ヨナベ（夜鍋）ヨーナベ

「『夜の鍋』で、『夕食後のしごと』をあらわす」（34ページ）となっているが、

大言海には

よなべ——夜ヲ日ニ並ベテスル義。（昼ヲ夜ニ延ベテ時間ヲ補フコト。夜ニ入りテ仕事スルコト）

大辞典（平凡社）では、ヨナベに夜鍋の字を記しているが、説明は大言海とほぼ同様である。

書評というものは、その著書を批評出来るような人。研究分野を同じくし、著者と同じ程度か、それ以上に研究をつんだ人に、はじめて出来るものである。

こういう点から言えば、方言学の権威、藤原与一博士が、全国各地のことばの上に立って書かれたこの書に対して、私など全くその資格のないものであるが、そして、又、書評は、その著者の根本的な研究態度について述べるべきであって枝葉末節の辞句の一つ一つについて言うべきものではないが、「甲南国文」誌の読者の半数近くが、本学の学生、卒業生である為、「書評」と「紹介」とを兼ねた形で、ここに盲評を記させて頂いた。本学、学生、卒業生諸姉に必

読の書として薦めたい書である。

（明治書院・昭和36年8月刊・一八一ページ二二〇円）

大学御指定

甲南堂書店

国鉄本山駅前
TEL 5700